令和三年度 フィールドワーク

三軒茶屋　三番街の保存を目指して

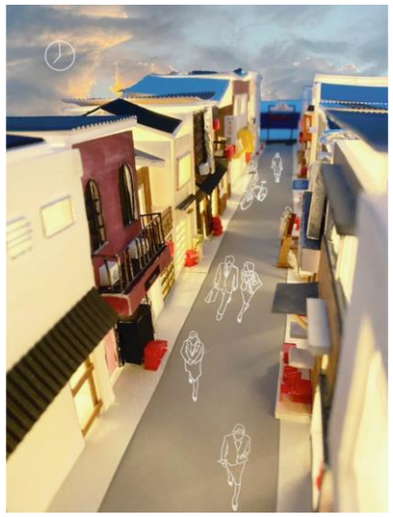
チーム5番街　19N1013 伊藤美咲

三番街

三番街は三軒茶屋の三角地帯に位置し、はみ出す傘やビールケース、看板、旗などから感じられる身体的なスケール感が特徴である。もともとのルーツは闇市で、東京オリンピックが終わり時代の波に乗り切れず取り残されたのがこの三角地帯である。この一帯は再開発されることが決まっており、近い距離で構成される昭和ならではのごちゃごちゃした雰囲気を保存するため選定した。

配置図　1／200

模型写真

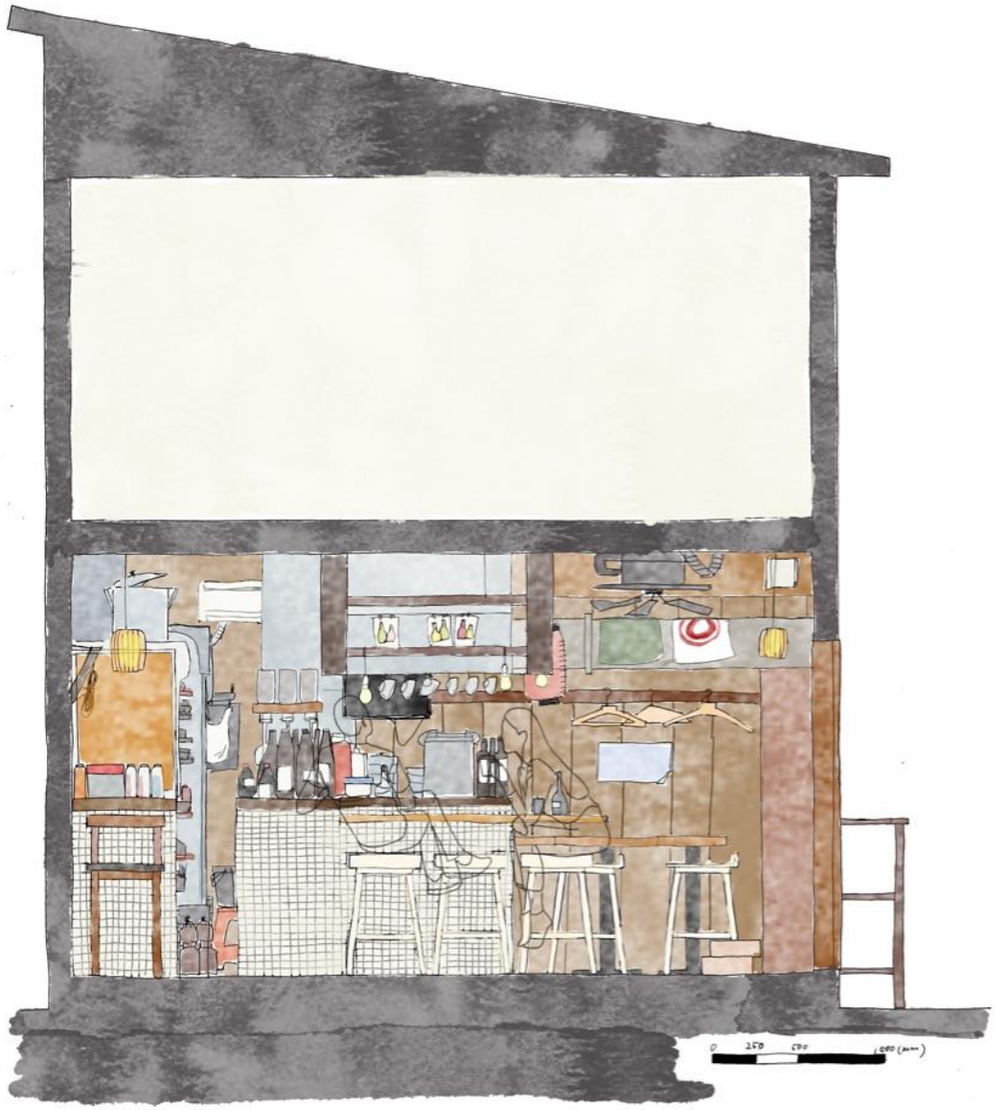


朝は大通りを避ける人々の通り道として

昼は写真撮影、観光地として

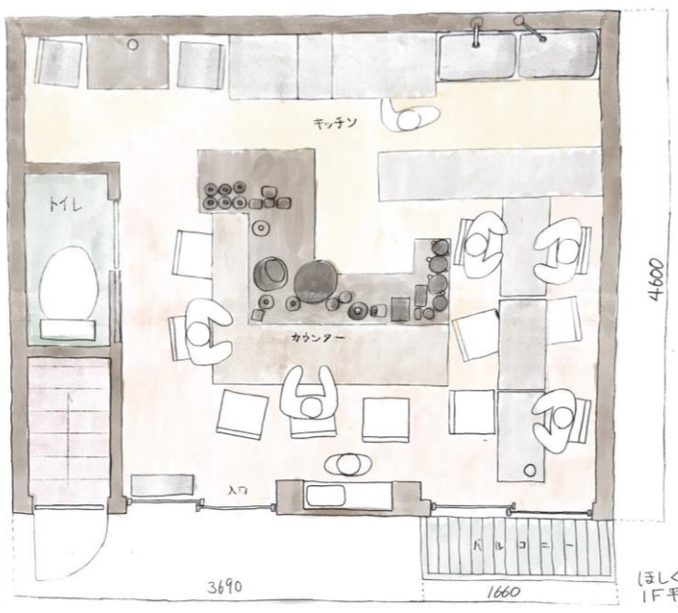
夜は飲み屋街として

時間によって顔が変わる三番街。コロナ禍で実際に体験することができなかった夜の飲み屋街としての三番街を
模型で表現するために明かりを灯した。実測を行った休日の昼間でも缶チューハイを飲む人々が見られたことから、
お店が開いていなくてもこの風景を求めて集う人々がいること、それが三番街の魅力の一つなのだと感じた。



ほしぐみ断面図 1:20

金肉屋 1:20



ほしぐみ 1/20
1F平面図

金肉屋
2F平面図 1/20

金肉屋 1/20
1F平面図

終わりに

今回、実際にほしぐみさんにお邪魔し中を実測させていただいた。
決して広くはない空間に、店員と客の近い距離感を感じさせる厨房とカウンターの配置、
また三番街全体の混沌とした雰囲気が店内にも漂っており、
整頓されていない居心地のよさがそこにあった。
外部の実測で何度か訪れるうちに、「このお店に飲みに来ている」というよりも
「三番街に飲みに来ている」という人々の意識を感じた。複数の店舗を行き来する店員や、
店の外を眺めながらバルコニーで飲む人々、その視線の先にあるほかの店や人、
そういったつながりが三番街をつくりあげている。
コロナ禍で人と人の距離の近さが問題視されるようになり、飲み屋街は良さを失いつつある。
再開発されてしまえば、今のように昭和が漂う雰囲気は消えてしまうだろう。
感染症が流行しなければ、人と人との距離が近いことはある程度歓迎されることであり、
飲み屋街の特徴や良さに目を向けることはなかったかもしれない。
実際足を運び実測をし模型や図面を作成したことで、
このように人のつながりを大切にする場は「なくしてはならないもの」
であると改めて感じた。